



鉢　し　す

どぶろく甕

風もあった。

野良の仕事が忙しくなると、おひるの中食を野良で食べる風があるがこれは単な仕事の都合の思いつきでなく、古く一日二回の食事を、野良でおひるを食べて三回の食事になる頃よりの伝統があるようにみえる。多忙、過労な季節になると、そのまた中間に、こびる、休みとかいって午前と午後に入れるから、都合五回の食事にもなることがある。秋か冬の夜ながのよわりには、もう一回夜食というのをとることもある。

いっぱい碗で一日一人五合を基準として食べていた頃より、農村、特に水田単作地帯の農村では、米の過食のことが気付かれていた。満腹感ばかり主眼として、蛋白質とか、ビタミン類の摂取が不均衡であったようである。卵は勿論、肉類・牛乳の類は病人食のようにさえ思われていた時代が、つい大正の頃まであったようにさえみられる。

栄養のある食物の配分、一般に温かい食物をとるようになったこと、一日三回、しかもかてを食べなくなったことなど、近頃の毎日の食事の変化かとみえる。そして、食事の際の敬虔さといおうか、釜神や神仏に供えてから、しかも自分の箸をとるとき、軽い祈り、感謝をこめるなどの風は、とみに失われようとしているようにみえる。